

「ラストピース」

第3話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18）大学1年生

高橋湊（13）（22）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

鈴木健一（41）理菜の育ての父

鈴木香澄（41）理菜の育ての母

白水透（54）バーのマスター。

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凜子（34）護身術の師範

大将

先輩

竹内魁（29）？

○バー・店内（夕方）

マスター・白水透（54）、カウンタ
ーを拭いている。

扉が開いて高橋湊（22）と鈴木理菜
（18）が入ってくる。

高橋「お疲れ様です。連れてきました」

理菜「はじめまして鈴木理菜です。よろしく
お願いします」

と、お辞儀する。

白水、優しく笑って、

白水「いらっしやい」

× × ×

テーブル席に座る理菜と白水。

白水、履歴書をサツと見て、

白水「鈴木さんには接客全般をお願いしたい
んだ」

理菜「はい！」

白水「テーブルのお客さんの注文とったり、
お会計したりね。小さくてアットホームな
店だから緊張しなくていいよ。分からない

ことは俺か湊に聞いてもらえればいいから」
理菜「分かりました！」

白水「何か聞きたいことはある？」

理菜「初めてのバイトで、夜遅いのも慣れてないので、自分がどれくらいシフトに入れるか分からないんですけど、最低週何日からになりますか……？」

白水「あーそんなの全然ないから大丈夫！」

毎日でも、週0でも！」

理菜「え？（きよとんと）」

白水「湊なんて超自由だから。この前も直前に遅れるって連絡してきたんだよ。まあ、ある女の子を助けたって聞いたから許したけど」

理菜「それってもしかして……」

と、高橋を見る。

高橋、頷く。

理菜、青ざめる。

理菜「それ私のせいなんです！ 本当にすみませんでした！ 高橋さんには迷惑ばかり

かけていて……」

と、頭を下げる。

高橋「迷惑ばかりかけられてます」

白水「へニコニコして〜うん、知ってた」

理菜、顔を上げる。

理菜「？」

白水「ごめんごめん。鈴木さんがどんな子か知りたくて意地悪なこと言ったね。ハツハツハツ」

高橋「性格わる〜」

理菜、目をパチパチさせる。

白水「ぜひうちで働いてくれると助かるんだけど、どうかな？」

理菜「もちろんです！　こちらこそ、よろしくお願いします！」

白水、にっこり笑う。

○同・店内（夜）

店内にはまばらに客が入っている。
カウンターには編集長・佐々木俊哉

(4 5) 。

高橋、シェイカーを振り、マドラーで手の甲に一滴つけて舐める。

理菜、興味津々で見つめる。

高橋「次これよろしく」

理菜「はい！」

と、ドリンクを持ってテーブル席に行く。

佐々木、理菜を見ながら、

佐々木「いい子そうじゃん。育ちの良さが滲

み出てる」

白水「ああ。すごくいい子だよ」

理菜、戻ってくる。

佐々木「理菜ちゃん。湊が先輩ヅラして調子

乗ってたら教えて。俺がガツンと言ってや

るから」

高橋「このオッサンの話はテキトーに流しと

けばいいから」

佐々木「お前。やっと終わったと思ったのに、

まだ反抗期かあ？」

高橋「そっちこそ、早速更年期きてる？」

高橋と佐々木、言い合う。

理菜M「仲いいんだな」

と、微笑む。

白水「この2人はいつもこんな感じなんだ。

そのうち慣れるよ」

理菜「はい（口角を上げて）」

扉が開いて師範・塚目凜子（34）が入ってくる。

高橋、優しい笑顔で、

高橋「師匠！」

白水「いらっしやい」

理菜「いらっしやいませ！」

凜子「お疲れ」

理菜、高橋と凜子を交互に見る。

理菜「何かの師匠さんなんですか？」

白水「凜子は教室で護身術教えてて、湊も習

ってたんだ」

理菜「（頷きながら）なるほど。だからあの時あんなに……」

凜子、佐々木の隣に座る。

高橋「いつものにします？」

凜子「今日は湊に任せる！」

高橋「かしこまりました」

と、口角を上げてドリンクを作り始める。

凜子、理菜を見て、

凜子「もしかしてこの子が新しい子？」

理菜「鈴木理菜です！ よろしくお願いしま

す」

凜子、理菜にぐっと顔を近づける。

理菜、ゴクリと喉を鳴らす。

凜子「お肌ぴちぴち。超可愛いッ！」

理菜、頬を赤らめる。

白水「湊の同級生なんだ」

凜子「（興味津々）湊って大学ではどんな感

じなの？」

理菜「どんな感じ……（考える）えっと……」

高橋「そんなこと聞かなくていいんで！」

と、割り込む。

凜子「だってえー気になるじゃん」

と、カウンターに肘をつけて身を乗り出す。

高橋「はい、モヒート」

と、グラスを出す。

凜子「さっすが湊。私のことよく分かってる」

と、上機嫌でグラスに口をつける。

凜子「ねえ、これ見てよ」

と、高橋にスマホの画面を見せる。

高橋、画面を覗き込む。

高橋「うわすご」

凜子「でしょー？ 湊もまた見に来てよ」

2人の距離が近い。

理菜M「仲良いんだなあ……」

と、高橋と凜子のやりとりをボーツと見つめる。

白水の声「理菜ちゃん。理菜ちゃん？」

白水が理菜を呼ぶが、気づかない。

高橋が理菜の顔の前に手をかぎす。

理菜「（我に返って）は、はい！」

白水「今日はもう2人とも上がっていいよ。

なんとなく雰囲気は掴めただろうし」

理菜「はい。ありがとうございます」

高橋「じゃあ帰るか」

佐々木「湊一緒に飲むぞー」

高橋「俺バイクだから無理ですよ」

凜子「置いてけぼいいじゃん」

高橋「やですよめんどくさい。それに未成年を早く帰さないと」

理菜「あの、私1人でも帰れるので大丈夫ですー
すー」

高橋「また歩いて帰るとか言い出すだろ」

理菜「……（無理に明るく）ちゃんとタクシ

ー呼ぶので大丈夫です！ だから私のことは気にせず！」

と、タクシニアプリを開いて見せる。

佐々木「よし決まりだな」

と、高橋の肩に腕を回す。

理菜、一生懸命笑顔を保つ。

○同・店内（深夜）

客は誰もいない。

カウンターには佐々木と凜子、カウンターの内側に高橋と白水が酒を飲んで
いる。

凜子「（ニコニコしながら）ほんと可愛いかった〜理菜ちゃん。湊が同世代の子と話してるのもなんか新鮮だったし〜」

湊「（佐々木を見て）いつもおじさんの相手させられてるからな〜」

佐々木「お前、今日こそ潰れるまで飲ませるからな〜」

と、湊のグラスに酒を注ぐ。

凜子「ねえ。湊は理菜ちゃんと昔会ってるわけでしょ？ 理菜ちゃんは湊に気付いてないの？」

高橋「覚えてないと思います。事件のすぐ後のことだったから。その頃の話は、多分記憶の奥底にしまい込んでる〜」

凜子「そっかあ……そりゃそうだよ〜ね〜」

白水「しつこいようだが湊、理菜ちゃんから何か聞き出そうなんて、」

高橋、白水の言葉に被せるように、

高橋「分かってる。さすがの俺もそんなことはしませんよ」

○三田大学・食堂

理菜と親友・花村夏凜（18）、昼ごはんを食べている。

夏凜「そういえば、どうだった？ 高橋さんのバーのバイト」

理菜「あぁーうん！ マスターも優しい人で、アットホームなバーだった。（無理に明るく）それでき聞いてよ！ 女性の常連さんがいたんだけど、その人がすごい美人なお姉さんで、高橋さんとなんかい感じなの。あれ多分付き合ってるんじゃないかと思うんだよね」

と、矢継ぎ早に話す。

夏凜「ちよちよちよ。なに、どういうこと？」

理菜「だから、綺麗な常連さんがいて、多分高橋さんの彼女だと思う」

夏凜「本人がそう言ったの？」

理菜「そうじゃないけど……」

夏凜「じゃあ分かんないじゃん」

理菜「分かるよ！　なんとなく！　雰囲気

で！」

夏凜「いや、大丈夫、自信持って！　その勘

は外れてる！　理菜鈍感だから」

と、理菜の肩に手を置く。

理菜「なんかサラッとディスプレイされてるよね私

別に鈍感じゃないし！」

夏凜「いやいやいや。それで、今日その高橋

さんは？」

理菜「今日は別のバイトみたい」

夏凜「バーの他にもかけもちしてるんだ！

そんなに稼ぎたいのかな」

理菜「彼女との結婚資金貯めてるとか？」

と、口を尖らせる。

夏凜、フツと笑う。

夏凜「じゃあさ、仮にその女の人が高橋さんの彼女だとするよ？ でもそんなの奪っちゃえばいいんだよ！」

理菜、フリーズする。

理菜「夏凜ってたまにすごいこと言うよね……」

夏凜「いい？ 絶対遠慮して引いちゃダメだよ！ 相手の女が年上なら尚更攻めていかなきゃだめ！ わかった？」

理菜「ちよっと待って！ 別に私高橋さんのこと狙ってるとかじゃないから！」

夏凜「（あしらうように）あーはいはい、分かっていますよー」

理菜「絶対信じてないでしょお」と、目を細めて夏凜を見る。

○ラーメン屋・店の外

○同・店内

親友・市川拓也（18）、カウンター

の大将に、

市川「3番テーブルさんつけ麺大盛りです」

大将「はいよ」

ガラガラと扉が開いて人が入ってくる。

市川「いらっしやいま……」

扉から入ってきたのは高橋。

市川「（啞然と）なんで……」

高橋「あれ、授業は？ まさかサボり？」

市川「1限で終わりましたけど何か？」（怪

しむ）あなたこそサボりじゃないんです

か？」

高橋「うん、サボった」

市川「……は？（呆れる）」

高橋、カウンターの大将に向かって、

高橋「すいません、醤油ラーメン1つ」

大将「はいよ！」

高橋、カウンターを通り過ぎて2人掛

けの席に座る。

大将「拓也、水！」

市川「……うす」

市川、嫌そうにピッチャーからコップに水を入れて高橋の所へ運ぶ。

市川、水を置いてまじまじと高橋の姿を見る。作業着を着ている。

高橋「なに？」

市川「バーでバイトしてるんじゃないんですか？ 理菜も始めたって聞きました」

高橋「あーうん。色々掛け持ちしてるの」

市川「大学も家も同じで、バイトも同じになるように理菜のこと誘導したんですか？ あなたもれっきとしたストーカーですよ」

高橋、真顔で市川を見つめる。

市川「……なんですか」

高橋「市川くんってさ、中学からあの子と一緒に緒なんだっけ？」

市川「なんであなたにそんなこと話さなきゃいけないんですか！ 関係ないですよね」

高橋「いやー。いつからあの子のこと好きなのかなと思って」

市川「なっ……」

高橋「（澄み切った瞳で）違った？」

市川、わなわな震える。

大将の声「拓也ー。醤油ー」

市川、大股でカウンターにラーメンを取りに行き、高橋の前にドンと置く。

市川「これ食ってさっさと帰ってください！」

と、踵を返して戻っていく。

高橋「いただきますー」

と、手を合わせてラーメンを啜る。

× × ×

高橋「ごちそうさまでしたー」

と、カウンターの前を通り過ぎる。

大将「ありがとうございましたー」

市川、ため息をついてレジに向かう。

高橋の伝票を見てレジに入力。

市川「（棒読みで）850円になりますー」

高橋、千円札を出す。

市川「（棒読みで）150円のお返しです。

ありがとうございましたー」

と、150円のお釣りを差し出す。

高橋、まだ受け取らない。

高橋「あのさ」

市川「早くお釣り！」

高橋「（真剣に）この前みたいなストーリーカーにつけられたことって前にもある？ あの子から何か相談されたことない？ あるいは、君があの子と一緒にいる中で、急に近づいてきた怪しいやつがいたり」

市川「（不審がりながら）別に、そんなのなかったですけど……なんでそんなこと聞くんですか？」

高橋「（ケロツと）いや。君がいれば意外と安心かもな。これからも守ってやれよ」

高橋、市川からお釣りをとって店を出ていく。

市川「なんでそんな上から言われなきやいけ
ないんだよ！ ていうか、お前が一番怪しいわ！！」

と、叫ぶ。

市川、高橋の後ろ姿を見ながら上がっ

た息を整える。

市川 M「アイツ、理菜のこと気にしすぎだろ。
なんなんだよ」

○バー・店内（夜）

テーブル席に客がいるが、カウンター
は空。

理菜、テーブル席で注文を取ってカウ
ンターに戻ってくる。

理菜「ビールとマンハッタンです。私ビール
入れますね」

白水「ありがとう」

理菜、テキパキとグラスを用意する。

理菜 M「今日はあの2人来ないのかな」

白水「湊いなくても全然回せるね。理菜ちゃ
ん仕事覚えるの早いから助かるよ」

理菜「色んなお酒が知れてすごく楽しくて。
早く私もお酒飲めるようになりたいです」

白水「それは楽しみだなあ」

扉が開いて高橋が入ってくる。

高橋「すいません遅くなりました」

白水「お疲れ」

理菜「お疲れ様です」

高橋「お疲れ」

高橋、店内を見回して、

高橋「あれ、今日師匠たち来てないんですね」

白水「そうなんだよ。理菜ちゃんもう完璧だ

から、湊いらなかったわ」

高橋「えーじゃあ俺なんかもらっていいですか？」

と、カウンターに座る。

白水、頷く。

理菜「（嬉しそうに）何にしますか？」

高橋「オレンジジュースで」

理菜「お酒じゃなくていいんですか？」

高橋「マスター。新人が俺に飲酒運転させようとする」

理菜「そうだ、バイクですもんね！ すいません（苦笑）」

理菜、オレンジジュースをグラスに入

れて高橋に出す。

白水「理菜ちゃんも飲みなよ」

理菜「いいんですか！　ありがとうございます
す」

理菜、グラスを出す。

高橋「ん」

高橋、ジュースのパックを持っている。

理菜「あっ、ありがとうございます」

と、グラスを高橋の方に差し出す。

高橋、グラスにジュースを注ぐ。

高橋「お疲れ」

と、理菜のグラスに自分のグラスをコ
ツンと重ねる。

理菜「お疲れ様です」

理菜、オレンジジュースを飲みながら
口元がにやけている。

○同・店の外（深夜）

理菜と高橋が扉から出てくる。

理菜と高橋「お疲れ様でした」

理菜、高橋に続いて階段を上っていく。

○雑居ビル・正面（深夜）

ビルの前にはバイクが停まっている。

高橋「はいこれ」

高橋、理菜に女性用のヘルメットを渡す。

理菜「ありがとう……ございます……」

理菜、ヘルメットを見つめる。

※ ※ ※

（フラッシュ）

高橋が後ろに凛子を乗せてバイクで走っている。

※ ※ ※

理菜「あの！ 私、ほんとに後ろ乗せてもらって大丈夫ですか？」

高橋「……？ うん」

理菜「そうですか……」

理菜、ヘルメットを被って高橋の後ろに乗る。

どこを掴もうか迷って、椅子の後ろを掴む。

高橋、理菜の方を振り向いて、

高橋「何やってんの？」

と、笑う。

理菜「（恥ずかしそうに）だって……」

高橋「そんなじゃ落ちるよ」

高橋、理菜の両手を掴んで自分の腰に回す。

理菜の頬が赤くなる。

高橋「よし、出発」

高橋、バイクを走らせる。

○大通り・車道（深夜）

車通りはほとんどない。

高橋と理菜を乗せたバイクが走る。

× × ×

赤信号でバイクがブレーキをかけて停まる。

急な停止で、高橋に思わずピツタリ抱

きつく理菜。

高橋「ごめん、大丈夫？」

理菜「（恥ずかしそうに）私こそすみません

……」

と、体を離す。

信号は赤のまま。

高橋「……バイトは慣れた？」

理菜「はい！　すぐ楽しいです。紹介してくれてありがとうございます！　」

高橋「なら良かった」

無言になる2人。

歩行者用信号が点滅して赤になる。

高橋「動くよ」

理菜「……はい！」

理菜、今度は思いっきり抱きつくようにしつかりと高橋の前に手を回す。

体が密着する。

理菜は緊張した表情。

高橋、無意識に少し頬が緩む。

車用信号が青になり、バイクが走り出

す。

○アパート・正面（深夜）

高橋と理菜がバイクで戻ってくる。

理菜、バイクから降りてヘルメットを外す。

理菜「ありがとうございます。これってあれですよ、彼女さんのやつですよ。すみませんお借りしちゃって……」

と、ヘルメットの中を払って高橋に返す。

高橋「これ理菜のだから。ここかけとくよ」

と、バイクのハンドルにかける。

理菜「私の……？」

と、目をパチパチさせて固まる。

高橋「ん？」

理菜「（ハツとして）それより今理菜って！

初めて名前呼んでくれました……！」

高橋「……そうだっけ」

理菜「（嬉しそうに）そうですよ！　今まで

ずっと『君』でしたもん！」

高橋、フツと笑って、

高橋「名前くらいで大袈裟すぎ」

理菜「だって……高橋さんからしたら、私たちなんてお子様だと思っし、一緒にいるの迷惑だったらどうしようって心配だったから……ちよつと距離が縮まった気がします。嬉しいに決まってるじゃないですか！」

高橋「（照れ臭そうに）はいはい」

と、階段を上って行く。

理菜も後に続く。

高橋、自分の部屋のドアの前で鍵を開けずに止まる。

高橋「……お子様とか思ってないよ。そこまで年離れてないし。危なかつかしくて目が離せないとは思ってるけど」

理菜「（笑いながら）おかしいなあ。これでも一応、昔から『理菜ちゃんはしっかりしてる』って言われてきたんですけどね」

その瞬間、高橋が一瞬で理菜の両手首

を掴み、ドアに壁ドンするように動きを封じる。

理菜「ふー」

理菜、手も足も動かさない。

高橋、理菜の顔を覗き込むように、

高橋「ほら、隙だらけじゃん」

理菜「（顔が赤い）！」

高橋、理菜の片頬をつまんで、

高橋「こんな風にされたらどうすんの？俺がいい人とも限らないんだから。簡単に人を信用しないこと」

高橋、理菜を解放する。

理菜「（感心して）確かに……でも私、昔から人を見る目には自信があるんです！だから、湊くんがいい人だってことは分かっています。これだけは、絶対」

理菜、ニコツと笑う。

高橋「！」

理菜「（伺うように）あ、湊くんって呼んでもいいですか？」

高橋「（小さく笑う）もう呼んでんじゃん」

理菜「（嬉しそうに）ですネ」

高橋、自分の部屋の前に戻る。

理菜「おやすみなさい！」

高橋「おやすみ」

理菜と高橋、それぞれの部屋に入って行く。

○同・理菜の部屋の中（夜）

理菜、ドアに寄りかかったまま左胸に手を当てる。

理菜「心臓飛び出るかと思った……」

理菜、喜びを噛み締める。

○同・高橋の部屋の中（夜）

高橋、玄関に立ったまま。

※ ※ ※

（フラッシュ）

理菜「みなとくん！」

と、駆け寄る理菜（9）。

※ ※ ※

高橋、懐かしそうな表情で部屋に上がる。

○三田大学・講義室の中

授業が終わり、次の授業の学生たちが入ってくる。

後方の座席で荷物をまとめる市川、同級生・西原圭吾（18）、成宮翔（18）。

後ろの扉から理菜と夏凜が入ってくる

成宮「おーい！」

と、手を振る。

理菜「前の授業、工学部だったんだ」

西原「しかも2コマ連続」

理菜「それはお疲れ様だ」

夏凜「やっぱり工学は男子が多いね。女の子

もちろほらいるけど」

成宮「でしょ？ 超むさ苦しいよ。それに比べて国文（国際文化の略）は女の子多くて

いいね〜」

と、教室を見回す。

成宮「なあ、あれ」

と、後ろの扉を見る。

一同、成宮の視線の先を見ると、教室に入ってきた高橋の姿。

理菜「湊くん！」

と、手を挙げる。

市川「（え？）」

と、理菜を見る。

高橋、理菜たちの元にやってくる。

高橋「前の時間、工学だったんだ」

市川「：：今日はサボらないんだな」

高橋「まーな」

一同、目を点にする。

夏凜「なにになに？ 2人ってそんな感じだっ

たっけ？ なんか急に仲良くなった？」

成宮「拓也熱でもあんじゃね？」

と、市川の額を触る。

市川「やーめろ！ 仲良くなんかなってねー

から！」

と、成宮の手を払う。

高橋「この間色々話したんだよな？」

市川「お前が一方的に話しかけてきただけだろ！」

西原「いつの間にかタメ語になってるし」

市川「敬語はな、敬ってる相手に使うもんだから。俺はコイツのことを敬う気は全くな
い！ 1ミリもない、毛ほどもない！」

夏凜「うっわぁ、最低……でも確かに敬語つて壁感じるよね。年上だけど同級生なわけだし。(高橋に)私もこれからタメ語でい
いですか？ ついでに湊くんって呼びたい
です！」

高橋「別にいいよ」

理菜「すでに呼ばせてもらってます」

成宮「俺も湊くんって呼ぼっと」

西原「……じゃあ俺も？」

全員、市川を見る。

市川「俺は呼ばないからな」

高橋「早くしないと次の授業始まるぞ。拓也」
市川「ふざけんな！ 馴れ馴れしく呼ぶな！」

高橋、フツと頬を緩める。

成宮「照れんなよ拓也ー」

西村「ほら、ほんとに授業始まるぞ」

夏凜「拓也、湊くんのこと大好きじゃん」

理菜、会話の輪にいる高橋の様子を見て微笑む。

○鈴木家・リビングダイニング（夜）

母・鈴木香澄（41）、ダイニングテーブルに座ってスマホで通話。

理菜の声「でね、なんか拓也と湊くんが急に仲良くなってる。拓也に言ったら否定するだろうけど、実はあの2人結構気合うと思
うんだよね」

香澄「へえ〜！ 楽しそうで安心した。その湊くんっていうのが、理菜の好きな人？」
ソファでコーヒーを飲んでいる父・鈴木健一（41）、誤嚥してむせる。

○アパート・理菜の部屋の中（夜）

理菜、通話中。

理菜「えい やだな、そんなんじゃないよ」

香織の声「（ニヤニヤしながら）でもさっきからその湊くんの話ばかりだよ？」

理菜「そ、それはあ……湊くんとは大学も一緒だし、バイトも一緒だし、部屋も隣で一緒にいる時間が長いから、当たり前だよ」

理菜、嬉しそうに壁の奥の高橋の部屋を見つめる。

○刑務所・独房室（夜）

竹内魁（29）、机に向かって手紙を書いている。

便箋の一番上には「高橋正雄様」と。

竹内「いっ……」

と、痛そうに頭を押さえて手紙を書き続ける。

○三田大学・グラウンド

曇天の中、学生がフットサルをしている。

親友・市川がシュートを決める。

西原「ナイス拓也！」

市川「サンキュ」

市川と西原がハイタッチ。

成宮「今の決めんのかよ。エグ」

と、市川のシュートを見て汗を拭う。

市川たちとは違う色のゼッケンを着ている。

その瞬間、地面にポツポツと雨が降り

始める。

成宮「あ」

と、手のひらを空に向ける。

先輩の声「片付けて撤収ー！」

市川と西原「はい！」

市川たち、コーンを回収して小走りです戻っていく。

○同・建物前

本降りの雨。

西原「お疲れ！」

成宮「じゃあな！」

市川「おう！」

西原、成宮と別れて、建物の中に入つて行く市川。

○同・建物内

市川、タオルでリュックの水分を拭く。自販機で飲み物を買っている理菜が目

に留まる。

市川「あれ理菜じゃん」

理菜「拓也！ 練習終わり？」

市川「うん。雨降ってきたから今日は解散」

理菜「（外を見て）ほんとだ！ 止まないかなあ？ 傘持ってきてないんだよね」

市川「この後なんかあんの？」

理菜「図書館でレポート終わらせてから帰ろうと思ってる」

市川「じゃあ俺も課題やろっかな。まだ雨降

ってたら送るよ。俺傘あるから」

理菜「ほんとにやった！　ありがと拓也」

さすがモテ男！」

市川「（呆れながら）そりやどーも。今日夏

凧は？」

理菜「夏凧はバイト」

市川「そっか……（周りを気にする）」

理菜「湊くんならないよ」

市川「（動揺して）別に何も言っていないだろ」

理菜「（ニヤニヤしながら）拓也さ、実は湊

くんと仲良くなりたいでしょ？」

市川「（怪訝な顔で）はあ？　そんなわけ！」

理菜「（しみじみ）分かるよその気持ち。湊

くんって、みんなのお兄ちゃんって感じだ

から、構ってもらいたくてつい絡んじやう

よね」

市川「俺は全く関わりたくない！」

理菜「（ニコニコしながら）はいはい」

と、歩き出す。

市川、諦めて理菜の後に続く。

○同・図書館

理菜と市川、それぞれパソコンを開いて向かい合って座る。

理菜、真剣な顔で口を尖らせてタイピングしている。

市川、キーボードで手を止めたまま優しい顔で理菜を見つめる。

市川 M 「昔から集中してる時はいつもあの顔なんだよな」

その瞬間、理菜が顔を上げて市川を見る。

市川、ドキツとする。

理菜 「（口パクで）もしかして、見惚れた？」

と、ドヤ顔。

市川 「（ジェスチャーで）違う。また口尖ってた」

理菜、恥ずかしそうに口元を隠す。

理菜 「（小声で）もっと早く教えてよ！！」

理菜、スマホで確認しながら顔を作る。

市川、愛おしそうに見る。

市川「（小声で）あとどんくらい？」

理菜「（小声で）もう終わりそう。拓也は？」

市川「（小声で）俺も」

理菜、頷いて作業に戻る。

市川のレポートはまだ2、3行しか進んでいない、ほとんど白紙。

○同・建物外（夕方）

まだ小雨が降っている。

理菜、空を見ながら、

理菜「やっぱまだ降ってるかあ」

市川、隣で傘を開く。

市川「ほら、帰るぞ」

理菜「うん！」

○住宅街・道（夕方）

相合傘をして歩く理菜と市川。

理菜、掲示板のチラシに気づく。

チラシには「8月7日・8日 花火大

会」と書かれている。

理菜「あ、花火大会。来月か」

市川「行く？ その頃もう夏休みだし」

理菜「いいね！　じゃあニッシーたちに声か

けといて！　私も夏凜誘つとく！　あと湊

くんにも声かけてみようかな」

市川、立ち止まる。

理菜「どうしたの拓也？」

市川「いや、その……」

理菜「あ！　拓也肩濡れちゃってる。ごめん

ね」

理菜、タオルで市川の肩の水を拭く。

市川「いいよ別に」

理菜「ちよつとうちで雨宿りして行きなよ。

そのうち止みそうだし。ね」

市川「……いや、いい」

理菜「（笑顔で）なに遠慮してんの？　拓也

らしくもない」

市川「あのなあ。一人暮らしだからって、誰

でもホイホイ家に入れんなよ」

理菜「失礼な！　さすがに仲良い人しか入れないし！」

市川「高橋湊もダメだからな」

理菜、察した顔で、

理菜「あぁ！　分かってる。もし湊くんを家に呼ぶ時は、拓也もちゃんと誘ってあげるから！」

と、市川の肩を叩く。

市川、大きなため息をつく。

○アパート・正面（夕方）

雨が止む。

市川、傘を閉じる。

理菜「良かった、雨止んだね。傘、ありがと」

市川「うん」

理菜「じゃあまた！」

と、階段を上る。

振り返って市川に手を振る。

市川、下から見上げながら、

市川「理菜！」

理菜「ん？」

市川「花火大会さ、2人で行こ」

理菜「2人って、私と拓也？」

市川「うん」

理菜「（戸惑う）いいけど……どうしたの？

なんで2人？」

市川「なんでって……理菜と2人で行きたい

から。それじゃダメかよ……」

理菜、首を横に振る。

理菜「分かった。（明るく）花火、楽しみだ

なく！」

市川「俺も」

理菜、ぎこちない笑顔。

市川「じゃあ」

と、歩いて行く。

理菜、市川の背中を見送りながら、

理菜「（言い聞かせるように）きっとみんな

には話せない悩みがあるんだよね。うん、

絶対そう」

（了）